

「夏休みの作品作り」が教えてくれたこと

早いもので一学期も残り二週間となりました。この二週間は、一学期の振り返りや復習など学習の定着に向けた取組に加え、夏休みや二学期に向けた準備等もあり、教師にとっては慌ただしい毎日になるものです。子供たちにとって夏休みは楽しみでしょうが、親御さんにとっては「長いな」と思われる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

さて、夏休みのイメージと言えば人それぞれだと思いますが、私にとって忘れられない思い出は、「夏休みの作品作り」です。毎年「何にしようか?」と迷うことも多かったのですが、完成させたときの充実感は今でも忘れません。特に小学校5年生のときに作った「ブックスタンド」は、デザインを考え、一人で材料を買いに行き、使い慣れないのこぎりや金づち、釘などを使って完成させました。釘打ちを何度も失敗し、仕切り板が斜めになるなど不格好なブックスタンドでしたが、仕上げに緑色のペンキで色を塗ると、それなりに仕上がったのを覚えています。

夏休み明けに自分なりの力作を学校に持っていくと、クラスメイトも各々作ってきた作品を机の上に置いていました。その中には、自分と同じようにブックスタンドを作ってきた友達がいたのですが、その作品は自分の物とは比べ物にならないくらい立派で、比べるのもおこがましいものでした。自分の中に少しでもあった自信が、もろくも崩れ去っていったことを今でも覚えています。

私の小学校では、それら夏休みの作品を校内に展示する前に、学級代表作品を選ぶことになっていました。当然、自分の作品なんて選ばれないと思っていたのですが、担任の先生は私の作品を選んでくれました。5年生の私にとっては選ばれた喜びより「何で?」という気持ちの方が大きく、家に帰って母親に尋ねました。すると、母親は「あなたが一人で作ったという努力を評価してくれたんでしょ」と話してくれました。当時はよく分かりませんでしたが、同じ教師となった今、不格好なブックスタンドを選んでくれた担任の先生の気持ちが分かるような気がします。

あのとき、担任の先生が私の作品を選んでくださったことは、作品の出来栄だけでなく、その作品が完成するまでの努力や挑戦する姿を、釘打ちを失敗した跡や長さの違う仕切り板などから感じ取ってくださったからなのだと思います。子供は認められることで自信をもち、その自信が次の挑戦意欲へとつながっていきます。

本校でも「できた」「頑張った」と実感できる経験を大切にしています。これからも結果だけではなく、そこに至るまでの過程や努力、工夫したこと、最後までやり遂げた姿を認め、励ましながら、一人ひとりの成長を支えていきたいと考えています。